

## 題目：高齢入院患者における排泄自立と現場（職員）での意識について

保健医療学専攻・先進的ケア・ネットワーク開発研究分野

学籍番号：12s3024 氏名：楠元 寛之

研究指導教員：竹内 孝仁教授 副研究指導員：小平 めぐみ

キーワード：高齢入院患者 排泄自立への意識、研修会への参加

### I. 研究背景

平成26年度の診療報酬改定の中に在宅復帰率が導入された。これまで回復期や亜急性期に限って求められていた在宅復帰機能を、急性期や慢性期にも課し在宅復帰にむけた取り組みが重要となった。排泄の自立状況が在宅復帰や家族負担に影響するとの報告もあることから、排泄自立の為におむつ外しへの取り組みは大きな鍵といえる。そこで、各病院での理念や体制がおむつ外しへの取り組む意識に関係していると予測された為、病院の体制、職員の意識について量的研究に加え質的研究を実施した。

### II. 研究目的

研究Ⅰでは、法人の理念や体制と病棟職員の意識の実態とその関連要因を検討し、研究Ⅱでは、インタビューを実施し、おむつ外しの現状と取り組んだ理由と取り組めない理由を分析し、高齢者入院患者に対しておむつ外しに取り組む為の意識に影響する要因を明らかにすることを目的とする。

### III. 研究方法

研究Ⅰ:対象は、研究者の勤務先近隣の有床診療所6施設、一般病棟4施設、一般病棟及び療養病棟2施設の職員412名にアンケート調査を実施した。方法は留置調査とし、施設用と個人用の2部構成とした。施設用は、病棟の属性、法人の体制について病棟責任者に回答を依頼し、個人用は職員の属性、おむつ外しの与える影響、可能性、実践、知識、研修について調査した。分析Ⅰは、単純集計すると共に、関連性の検証にはクロス集計後 $\chi^2$ 乗検定をおこなった。分析Ⅱは、「まずトイレに誘導する」を従属変数、施設要因、個人要因、おむつ外しの影響、可能性、知識、研修の23項目を独立変数とし、単変量ロジスティック回帰分析で有意な項目を選択し、多重ロジスティック回帰分析(変数減少法:尤度比)にて関連が見られる質問項目間で変数を選択し、選択された項目にて解析した。統計学的検定はPASWStat21を用いた。統計学的有意水準は、両側検定にて危険率5%未満とした。

研究Ⅱ:研究Ⅰの対象施設で協力・同意の得られた各病院の病棟師長とその他職員へ1名ずつ、研究Ⅰで把握出来なかった職員の意識を掘り下げ聞き取り調査した。20分~30分程度、半構造化面接を実施し、同意を得てICレコーダーに録音し、得られたデータから逐語録を作成し、質的帰納的研究法に基づいて分析した。

### IV. 倫理的配慮

本研究は、国際医療福祉大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号14-Ig-25)。

### V. 結果

研究Ⅰ:有床診療所6施設、一般病床4施設、一般及び療養病床2施設計12施設。職員の回答412名中306名(74.2%)であり内訳は、看護職200名(65.3%)、リハビリスタッフ36名(11.7%)、介護職61名(19.9%)、相談員1名(0.3%)、無記入8名(2.6%)であった。

分析 1: [おむつ外しの実践] 水分摂取の促し、歩行練習、下剤外しに取り組む職員は、トイレ誘導に有意に取り組んでいた。[施設間]有床診療所では、水分摂取の促し、下剤外しに有意に取り組み、おむつ外しに必要な知識を持っていると思う職員が有意に多かった。一般病棟は、水分摂取の促しは有意に少なく、研修会へ参加したいと思う職員が有意に多かった。一般及び療養病棟では、おむつ外しはその人らしさに影響すると思っている職員が有意に多かった。[職種間]看護職はおむつ外しの可能性に関してはあまり無いと思い、おむつ外しの実践も有意に取り組んでいなかった。介護職は必要な知識は持っていると思い、便意・尿意の訴えが無い例、意思疎通困難な例でもおむつ外しは可能性があると思いい、歩行練習やトイレ誘導を有意に実践していた。しかし、水分摂取の促しは有意に取り組んでいなかった。リハビリ職は自力歩行困難な例でもおむつ外しの可能性があると思いい、歩行練習を有意に実践していた。全職種において研修会へ参加したいと有意に思っていた。

分析 2: 単回帰分析では 16 項目（施設要因 5 項目、個人要因 11 項目）が有意な関連を示した。これらの変数から質問項目毎の相互の関連性を検討し、選択された 9 項目中から最終的に 5 項目（施設要因 2 項目、個人要因 3 項目）が選択された（Hosmer と Lemeshow の検定  $p=0.731$ 、判定的中率 81.8%）。[施設要因]在院日数が長い病院は有意に取り組んでいた（オッズ比：95%信頼区間）（1.017:1.002-1.032）。一方、障害者日常生活自立度が自立になる程有意に取り組んでいなかった（0.939:0.902-0.907）。[個人要因]自力では歩けない例もおむつ外しの可能性があると思いいている職員（1,785:1.131-2.816）、研修会への参加を希望する職員（1.794:1.124-2.865）、おむつ外しに必要な知識を持っていると思いいている職員（3.155:2.069-4.813）はおむつ外しに有意に取り組んでいた。

研究 II: インタビュー協力者は、診療所 6 名、一般病棟 6 名、一般及び療養病棟 1 名の合計 13 名であり、27 個のカテゴリーと 51 個のサブカテゴリーが抽出された。カテゴリーを【】、サブカテゴリーを《》で示す。入院患者の医療重視の観点から【患者像によって取り組めず】さらに《人員不足》《業務が多くて対応困難》等の理由や在院日数の短縮で【取り組めない環境】があった。また【おむつ外しの知識不足】や【おむつ外しへの検討不十分】で取り組めていなかった。更に《転倒への不安》からおむつ使用となる状況があった。一方で取り組んでいる職員は【おむつ交換への違和感】を感じており、【出来る能力を評価】し、《積極的なトイレ誘導の実践》を行っていた。その際には、人員不足に対して《業務内での工夫》を行ったり、転倒に関しては《転倒予防の対策》を行ったりしていた。更に【排泄委員会を開催】し、委員会が無い施設は、《カンファレンスを開催》し必要な知識を習得していた。

## VI. 考察

おむつ外しへの取り組みは、医学的管理から疾病重視の看護や在院日数の短縮で取り組めない現状があった。在院日数が短縮されるなか、入院に至った主疾患の治癒後いかに早期に取り組むかが今後の課題といえる。全職種とも、研修会への参加を有意に希望しており、参加の意識が高い職員や自力では歩けない場合でもおむつが外せると思いいている職員はおむつ外しに取り組んでいることから、委員会を設置し事例検討会や研修会等の開催にて知識の習得が必要といえる。その為に、法人の理念や委員会、事例検討会は最終要因として有意ではなかったが、知識習得の体制作りとして欠かせない要因といえる。更に、水分摂取の促し、下剤外し、歩行練習の実践がおむつ外しへの取り組みに有意に関係していることから研修会を通じて、知識を得たと意識することも大事な要因であると示唆された。